

随 筆

街道を歩く（４） 鎌倉街道 古渡～真清田神社

佐々木 教祐

1. 名古屋の江戸時代の街道

まず今もはっきり残っている江戸時代の街道を見ておきたい。徳川家康は、慶長6年（1601年）に「五街道整備」により、五つの街道と「宿（しゆく）」を制定し、道としての「東海道」が誕生する。江戸の日本橋から小田原宿、駿府宿、浜松宿、宮宿（熱田宿）を経て、七里の渡しで伊勢湾を渡り、桑名宿、草津宿を経て京都の三条大橋まで五十三次ある。七里の渡しでは宮から桑名までの七里（約28km）を海を船で揺られながら渡るのに、6時間余りを要した。このため、これをバイパスする佐屋路が開かれ、宮から桑名まで9里（約36km）で結ばれた。美濃路は東海道の宮の宿から名古屋・清須・稲葉・萩原・起・墨俣・大垣を経て中山道垂井の宿に至る街道で、東海道から分かれて美濃へ向かう街道のため美濃路と呼ばれた。平安時代、都から東国への道は、東山道と東海道があり、この二道を美濃～尾張で繋ぐ道が美濃路の原型となった。江戸時代の美濃路は織田信長の頃から整備されたもので、関ヶ原の戦いの後、京・大坂と江戸を結ぶ重要な官道として、五街道と同じく道中奉行の支配下に置かれた。美濃路は桶狭間の戦いで信長、小田原征伐で秀吉、関ヶ原の戦いで家康の凱旋道となり、吉例街道と呼ばれた。美濃路より分かれる津島街道、中山道加納宿につながる岐阜街道、犬山に向かう岩倉街道が整備された。その他、尾張の殿様が使った木曾街道と呼ばれる上街道があり、中山道の伏見宿（現在の岐阜県可児郡御嵩町）に繋がっていた。尾張藩はこの上街道を使うように奨励したが、土岐川（この川は庄内川に繋がっている）沿いの高低差の少ない今の19号線沿いの中山道大井宿（現在の岐阜県恵那市）につながる庶民の道、下街道が盛んに使われた。下街道は善光寺道とも言われ善光寺参りや御岳参りの信仰の道でもあったが、最も利用されたのは、海のあるものを山へ、山のものを海辺へ送り売買をする交易の道だった。その他、信州の飯田に抜ける飯田街道などもあった。これらの道が整備されるに伴いそれ以前に使われてきた道（通称、鎌倉街道）は、歴史的役目を終えて忘れ去られていったようだ。

2. 鎌倉街道・古渡（名古屋市中区）～萱津神社（愛知県あま市上萱津）

前号は二村山から尾張の東にあたる天白川の海水の入った低地帯を越え瑞穂台地と熱田台地の道を歩いた。このあと庄内川・木曾川・長良川・揖斐川を越えて中山道に繋がる道を歩く。

織田信秀が築いた古渡城跡にある東別院から西に進むと国道19号線と名古屋都心環状線が交わる場所の近くに「古渡稻荷神社」があるが、この付近を鎌倉街道が通っていたと伝えられている。この辺りは空を見上げると名古屋高速が走っており、今も交通の要衝なのがわかる。山王通りを西に歩くと少し下りになり、JRと名鉄の下をくぐるがその少し前に少し南に入った所に尾張史にも書かれている露橋神明社がある。さらに進むと中川運河に出て、小栗橋を渡る。鎌倉街道は別名小栗街道とも呼ばれ、尾張名所図会にも小栗街道と書かれている。小栗とは説教節や歌舞伎で有名な「小栗判官」のことで、判官は瀕死の状態で藤沢から鎌倉街道を西に、最後は熊野の湯の峰まで引かれて行き、蘇るという話から小栗判官が通った道を小栗街道という名前が残っている。この故事にちなんで橋の名が付けられたようだ。説教節とは、三河八橋から黒田の部分を引用すると『三河に掛けし、八橋の、蜘蛛手（くもで）にものや、思ふらん。沢辺に匂ふ、杜若（かきつばた）。花は咲かぬが、実は鳴海（なるみ）。頭護（とうご）の地蔵と、伏し拝み、一夜（いちや）の宿（やど）を、とりかねて、まだ夜は深き、星が崎、熱田の宮に、車着く。車の檀那御覧じて、かほど涼しき宮を、たれか、熱田とつけたよな。熱田大明神を、引き過ぎて、坂はなけれど、うたう（尾頭）坂、新しけれど、古渡（ふるわたり）、緑の苗を、引き植ゑて、黒田と聞けば、いつも頼もしの、この宿（しゆく）や。』などと地名を面白おかしく歌いこんでいます。小栗橋で中川運河を渡り、神明社・熊野社を通り、名古屋高速と黄金ICの間を抜けると関西線と近鉄線を跨ぐ長い鉄橋を渡る。この向野橋（こうやばし、橋長119m）は昭和5年（1930）、当時の日本国有鉄道（国鉄）名古屋機関区設置時に設けられた名古屋で最も古い橋と思われる。実はこの橋のトラス橋部分は明治32年（1899）、京都鉄道によって保津川橋梁として京都の保津川に架橋されたもので、米国A&Pロバーツ社で製造された。架橋当時は日本最長であった支間長は保津川下りに配慮したものであったという。明治39年（1906）、京都鉄道が国有化されると路線は山陰本線（旧線）となったが、大正11年（1922）4月3日、保津川橋梁で列車の脱線転覆事故が発生。損傷を受けた橋は修理されて再び使用されたのち昭和3年（1928）に架け替えられ、旧橋はここに移設された。現在、橋は老朽化のため歩行者のみ利用可能となっている。橋には、「土木学会選奨土木遺産 2016 向野橋」のプレートが

埋め込まれている。橋からすぐ道に降りると金山神社の前を通る。金山神社は名古屋城築城の際、このあたりを流れていた笈瀬川（おいせがわ）を使って石材を運んだ際に現在の露橋付近に石切場を置いていたと伝わっており、ここで働いた石工たちの信仰を集めたとされている。さらに進み日吉公園内にある秀吉（幼名日吉丸）の母が男の子を授かるように日参して祈ったという旧日吉権現の日の宮神社を経て創建に源為朝が関わる下中八幡社を通り、貞治三年（1364）「尾張国神名帳」に掲載される古社である油江天神社を経て日蓮宗の信者で武将の加藤清正の出生地と伝えられる妙行寺から豊国神社のある中村公園に着く。この公園のすぐ西側にある明（あかり）神社は鎌倉時代に萱津の東宿の鎮守として、熱田神宮より日本武尊を勧請したといわれている。別名「花の宮」ともいわれていた。東宿は鎌倉街道の宿駅で賑わいを極め、壮麗な神社であったと思われる。境内の所在地は字名を宿跡と呼ばれていた。仁治3年（1242）の東関紀行にも「萱津の東宿社」として紹介されている。東関紀行には『萱津の東宿の前を過れば、そこらの人あつまりて、里もひびく計り（ばかり）にののしりあへり。今日は市の日になんあたりたるとぞいふなる。往来のたぐひ、手毎にむなしからぬ家づ友、彼「見てのみや人にかたらん」とよめる。華の形見にはやうかはりておぼゆ。』とあり、要約すると、その日は市の日に当たり里も響くばかりには大騒ぎをしている。村人は手に手に家への土産を持っていたが、人々には「都人が花を持っていたような」風流さは見られない。この部分は鎌倉時代の東宿の賑わいを描写したものだ。このすぐ西には庄内川と五条川（今は新川に合流）があり、これらの川が増水した時の船待ち宿として西へ旅する人の拠点になっていたと思われる。庄内川と新川を渡ると甚目寺下萱津に入る。豊公橋と萱津橋を渡った左手の新川堤防の上に庄内川の船着き場跡といわれる月之宮神社があり、坂を下った所には戦国時代以前に創建された三社宮神社があり、また近くには弘仁年間（810～823）創建とされる宝泉寺がある。萱津橋からの道を横切って北に向かう五条川沿いの道が鎌倉街道と言われている道である。この道沿いには実成寺、光明寺、妙勝寺、正法寺、萱津神社がある。実成寺は元応元年（1319）創建とされるが、弘安六年（1283）9月26日付け寺領寄進の古地図（富田庄古地図）に明記されており、元応元年より古いとも云われる。本堂は織田敏秀（織田信長曾祖父）が改修したと云われ、山門（四脚門本瓦葺）は福島正則寄進と伝わる。光明寺の創建は弘安五年（1282）で一遍上人の直弟子遊行二世他阿真教を開基とする。その後、72僧寮が立ち並び萱津道場として栄えた。鐘楼門は寺記によれば、享保八年（1723）萱津屋武兵衛の寄付で建立された。豊臣秀吉が8歳から10歳まで預けられたという。妙

勝寺は弘法二年（1262）、日蓮の弟子、日妙の創建と伝わる名刹で、かつて末寺30余坊を有していた。正法寺は、天平勝宝年中（749～756）萱津神社の社僧の創建と云われ、道沿いの垣根には鎌倉街道の案内板が設置されている。萱津神社は御祭神は、鹿屋野比売（かやぬひめ）で、漬物発祥の地、漬物祖神、良縁の神として崇敬を集めている。今は見られないが、神社付近の森は「阿波手の杜」と呼ばれ、大和武尊と宮簀媛命（みやずひめのみこと）がここで再会できなかったことから、この森を「不遇の杜（阿波手杜）」と呼ばれるようになったという。萱津社は全国唯一の漬物の神様として知られ、毎年8月21日に「香の物祭（漬物祭）」が行われ、全国から大勢の漬物業者が参拝し、賑わっている。萱津社は、人々が野菜と塩をお供えしていたところ、ほどよい塩漬物が誕生したという。その後、当地を訪れた大和武尊が「藪に神物（こうもの）」と称え、それが漬物をあらわす「香の物」となったという。神社の道沿いにも鎌倉街道の案内板がある。

3. 鎌倉街道・萱津神社（あま市上萱津）～真清田神社（愛知県一宮市真清田）

萱津神社から五条川の堤防沿いに進むと津島街道と法界門橋で交差する。このすぐ近くに「阿波手森」の石碑が建つ。また津島街道を少し西に進むと有名な甚目寺観音がある。伝承によれば、推古天皇5年（597）伊勢国の漁師である甚目龍麿（甚目龍麻呂、はだめたつまる）が漁をしていたところ、当時海であったこの付近で観音像が網にかかり、その観音像を近くの砂浜に堂を建て安置したのが始まりという。天智天皇が病気になったとき、甚目寺で祈祷したところ、快癒したことから甚目寺は、勅願寺となったと云う。五条川堤を萱津神社から法界門橋の西詰で津島街道と交差し、まっすぐ名鉄津島線を越えて進むと川から離れ、600年程前に斯波氏が清洲に築城した頃、武器を製作する鍛冶工を住まわせ神社を勧請したと伝わる金山社と萱津妙勝寺27世宝満院日繁により建立された宝満寺を通り、さらにまっすぐ進んで名鉄新清洲駅の近くにある土田明神の前を北に向かうと大吉寺がある。大吉寺の創建は久寿二年（1155）とされ、永享11年（1439）八代将軍足利義教（よしのり）が富士山への途次、この寺に詣でたとの記録がある。寺の前の道を左に回り込んだ奥に源頼朝が上洛の途、「白鷹が息うを見て霊鳥の奇瑞は吉兆なり」として帰洛後に創建したと由緒書きにある石清水八幡宮がある。名鉄の線路に阻まれて今は道がないが、線路を越えたところに東勝寺がある。この寺は創建は久寿二年（1155）と伝えられ、永享四年（1432）八月将軍足利義教が富士遊覧（独立的な動きをみせる鎌倉公方足利氏への牽制）の途次、この寺に詣るとの記録がある。ここから西に折れ

て迦具豆知（かぐつち）神社を通過して清州3丁目の信号で美濃路に繋がる。美濃路は東海道線を越えて清州駅の400m 東を通り、道は線路に徐々に近づき応保元年（1161）平清盛の寄進で建立された長光寺前を通り美濃路から岐阜街道が分かれる踏切のすぐそばの四ツ家追分に達する。尚、長光寺門前には四ツ家追分に立っていた昔の石の道標が四方を鉄板で固定されて立っている。四ツ家追分からは岐阜街道と同じ道を進む。妙長寺を過ぎるところで岐阜街道と別れて、下津（おりづ）の古刹、延応元年（1239）創建と伝わる阿弥陀寺、少し北東にある延元二年（1337）創建の円通寺、養老7年（723）創建の円光寺を通りまっすぐの道を北上すると広幢寺（こうどうじ）に突き当たる。ここから北北西に道をジクザクにとり住吉神社を通り稲沢市下津小学校前の下津城跡に至る。この道をまっすぐ北に向かうと交差点に面して小さな白山神社があり、その裏に等樹寺がある。道はここから2筋西の岐阜街道に重なり赤池一里塚跡で岐阜街道と別れ金龍寺、八剱神社とめぐり名神高速道路沿いに西に折れて岐阜街道沿いの赤池古墳に至る。昔は、この古墳の東に三本池（三本木池）が広がっており、ここに立つ石碑には鎌倉街道が通っていたと記されており、ここが休憩所だったようだ。この辺りは木曾川の支流が乱流しており歩きづらい湿地だったようだ。赤池の名前も自生した蓮の花から取ったとの説もある。ここから西の東海道線近くに「真清田大神降臨地」の石碑が建つ油田遺跡もあり、線路を越えたところに子生和（河曲）（こうわ）橋がある。この橋は大江川に架けた鎌倉街道の橋で、源平盛衰記に源行家が下津に陣し此処で決戦したと伝わり、尾張藩主徳川義直がこの橋を架けたという。そして今も残る子生和の地名の由来は、説教節「小栗判官」に出てくる照手姫がこの地で安産したという伝承に因むとのことである。名神高速道路を越えて少し西に入った三十八所社からまっすぐ進み日吉神社を通過して妙興寺に出る。妙興寺は広大な森に囲まれた有名な古刹で貞和4年（1348）尾張国中島城主中島蔵人の次男滅宗宗興によって創建され、先師にあたる南浦紹明（なんぼじょうみょう）を勧請開山とした。伽藍が完成したのは貞治4年（1365）のことである。この間、文和2年（1353）には足利義詮の祈願所となり、延文元年（1356）後光厳天皇の勅願寺となっている。明治時代に火災で伽藍を焼失し、方丈は明治26年（1893）、庫裏は明治30年（1897）にそれぞれ再建された。重要文化財の勅使門は創建当初来の遺構を今日まで伝えている。当門には1353年後光厳天皇より賜った勅額『國中無双禅刹』が掛かっている。また、室町時代末期の剣聖で新陰流開祖の上泉伊勢守信綱が剣禅一致の精神を会得するため妙興寺に滞在して修行に励んだとして、境内に「上泉伊勢守信綱居士修道跡」の石碑が立っている。

東海道線を東に越え牛野通りの信号を北に折れ岐阜街道を300mほど進み一筋東に入ると牛野明神社がある。ここには照手姫袖掛松の碑がある。照手姫は歌舞伎や浄瑠璃で名高い「小栗判官」に出てくる伝説の美女で小栗判官と京へ向かう途中、この地の松に小袖を掛けて休息したと伝わる。神社の東の道をまっすぐ進むと神亀年間（724～729）行基の草創とされ、弘仁年間（810～824）弘法大師が真清田神社に参籠のとき、塔堂を再興したと伝えられている福寿院と馬頭観音堂を通り、さらに二筋東の交差点に建つ浜神明社に至る。ここは400m程西にある尾張国一宮・真清田神社の境外摂社だ。『日本書紀』に「美濃」、『倭姫命世記』に「中島宮」とある、天照大神を奉斎した倭姫命が滞在した元伊勢【三重県伊勢市に鎮座する伊勢神宮（皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮））が、現在地へ遷る以前に一時的にせよ祀られたという伝承を持つ神社・場所】の伝承地の一つで、社号は昔は浜辺だったという伝承に由来する。本宮である真清田神社の東に鎮座しているため、昔は東神明社とも言ったと云う。神社に接する道を西に進むと尾張の一宮である真清田（ますみだ）神社に至る。真清田神社は平安時代、国家から国幣の名神大社と認められ、神階は正四位上に叙せられ、尾張国の一宮として、国司を始め人々の崇敬を集めた。鎌倉時代には、順徳天皇は当社を崇敬され、多数の舞楽面を奉納された。その舞楽面は、現在も、重要文化財として当社に保存されている。江戸時代には、徳川幕府から神領として、朱印領333石を奉り、また尾張藩主徳川義直は、寛永8年（1631）当社の大修理を行う等、崇敬が篤かった。神社楼門前の左手生垣の中に阿仏尼が真清田神社を詠んだ歌碑がある。十六夜日記には、『又、一宮といふ社を過ぐとて、「一の宮名さえなつかし二つなく三つなき法（のり）を守るなるべし』すなわち、一の宮とは名まで心が引かれるよ、この上ない仏法を守ってくださいというのであろう。

参考 1) 池田誠一 「なごやの鎌倉街道をさがす」 風媒社 2012

(名古屋大学名誉教授)



街道1



街道2(街道1に続く)



街道3(街道2に続く)

私の歩いた鎌倉街道(古渡～真清田神社)